



TITLE:

九州[海]岸の奇[勝]

AUTHOR(S):

石川, 成章

CITATION:

石川, 成章. 九州[海]岸の奇[勝]. 地球 1925, 3(1): 191-200

ISSUE DATE:

1925-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182801>

RIGHT:

九州海岸の奇勝

北海道、本州、四國、九州の四大島の中で、海岸線の最も屈曲に富み複雑であるのは九州であるのは誰でも知る所であつて、沿岸に優秀なる港灣や、突角奇勝の頗る多い事は言を待たない、是等の詳細なる記述は到底短篇の企及する所でないのみならず、自分未到の地も尠くないから、只曾遊の地のみに就て簡單に見聞を記述して責を塞ぐ事にした。

九州沿岸中最も屈曲灣入の複雑なのは西海岸であつて、西北及び東北海岸と南海岸とが之に次ぎ、東南の海岸が最も屈曲が少ない。

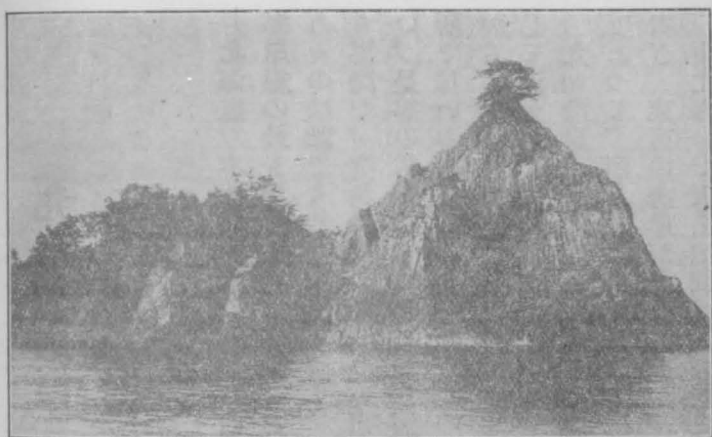
西北海岸で天然地理、人文地史の兩方面から、最も重要で且つ興趣の多いのは博多灣であるが、是は中山博士の詳細なる論述に譲りて之を省く。

石川 成章

一、芥屋の大門

博多灣の西に於て第一に擧ぐべき奇勝は、有名なる芥屋ヱヤの大門マカドである、大門崎は博多灣の西を擁せる糸島半島の西南の突角で、玄武岩より成り、立界灘より打ち寄せ來る豪宕なる波浪の浸蝕を受け、海に面する突角は削立せる數十丈の絶壁を爲し、水際には約三十間以上の深さまで水平に穿たれたる洞窟がある、五角或は六角の柱狀節理は實に見事で、或は直立せるものあり、斜立せるものあり、横臥せるものあり、長さは數間乃至數十間に及び、洞窟の内部まで恰かも材木を駢立したるの觀があつて、深藍色の潭淵に臨み、前面は名にしおふ立界灘で一望涯なく、其雄偉奇拔の風趣は、他に其比を知らない。

岬角の基部は粗粒狀花崗岩で、其一部は霏爛して砂岩の狀態を爲して居る、玄武岩の岩漿はこの花崗岩臺地上に流れたものであつて、其冷



芥屋之神窟

却の際收縮して表面から龜裂を生じこの龜裂が漸次深部に及んで柱狀節理を爲したものであることは、現場に於て蘚苔や雜草のはびこりて居る岩盤の表

面に於ける縦横の龜裂と、波浪に破壊せられたる側面の柱狀節理とを觀れば明瞭である、この種の玄武岩は、我日本海沿岸には處々に流出したもので、但馬の玄武洞附近から、伯耆の沿岸處々に露出し、出雲の海中では大根島小根島を形成し周防萩の海岸には石英玄武岩があり、博多灣内では殘の島に露出し、玄界の奇巖立神岩も是であり、唐津灣の七ツ釜洞窟も亦同種の岩石である、其より北松浦、東彼杵、北高來の諸郡を経て遠く五島列島に及んで居る、我日本海沿岸には日本海陥没の結果、本州骨格の走向に平行なる拆裂線が出来、この拆裂線に沿ふて處處に玄武岩の迸流を來したもので、多くは粒狀の橄欖石を數多散點せる微粒質の正玄武岩（*phanitic normal Basalt*）であるが、往々石英を散點するのは面白い現象である。

芥屋大門の觀光は、博多より汽船を利用するのが最も便利であるが名にしおふ荒海であるから、五六月頃の最も海の静かな季節を選ばねばならぬ、陸行ならば、福岡の西端今川橋から北

筑軌道車で前原町に至り、是より馬車で芥屋に行けば、一年中何時でも支障は無いが船で洞窟の奥まで入らうとすれば、矢張五六月の交の午前に限る、午後は風が起りて白浪巖を噛み洞窟の探究は六ヶ敷い。

二、唐 津 灣

唐津灣の風光を賞するに最も佳なるは、舞鶴城址たる唐津公園の丘上である、前面に大島、

高島、神集島、鳥島は何れも臺地狀を爲し、碧波漫々たる海上に青螺を點じ、南には玄武岩より成れる鏡山（領巾振山）が赤卓狀に聳立し、松浦潟には松浦の長橋が虹霓の如く横はり、其東

（松浦百景）玄海ノ奇巖立神岩 其一

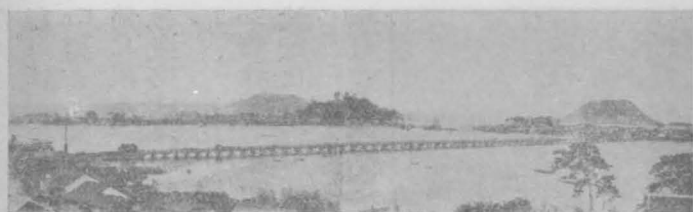


二其 釜ツ七巖奇ノ界玄（景百浦松）

方には松青砂白の虹の松原砂洲が弓形に長く引いて居る、其光景の美は轉た行人をして恍惚たらしむるものがある、丘を下り満島に渡れば一

帯の虹の松原で海水浴場として海濱院の設けがあり、三伏の候にも尙涼風颯々炎熱を忘れしむるに足る、眞に絶好の避暑地である。

唐津全景



公園より西北及び東南の砂濱が弓狀に彎曲して恰かも鶴の兩翼を張れるが如き狀を爲して居るから舞鶴の名を得たものである、是は潮流が東は濱崎方面より、西は大島方面より流至し、漂砂を堆積して此の砂洲を形成したものである。

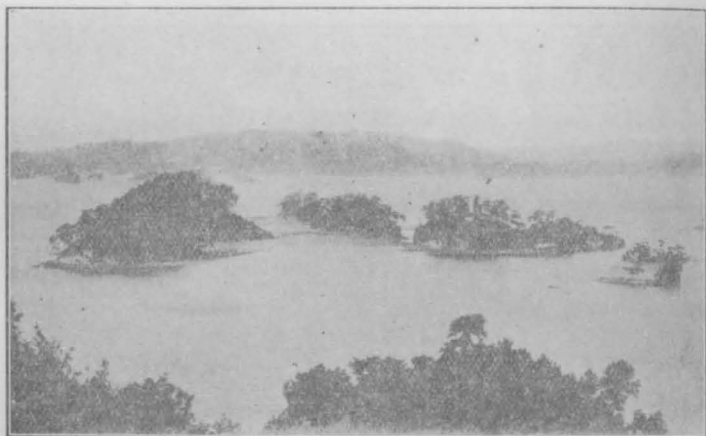
鏡山を初め玄武岩より

成れる島嶼が臺地狀を爲せるは是れこの地方の地形の特徴であつて熔岩臺地の適例である、其配列は前記の本州日本海岸に平行なる断裂線上にあるのは言ふまでもない。

福博地方から唐津に至るには、從來は長崎鐵道線にて佐賀市の西、久保田に至り、久保田驛より分岐せる唐津鐵道にて唐津に向つたのであるが、近頃北筑軌道が唐津まで開通したから、是を利用する方捷徑で、便利であるのみならず、糸島半島の基部なる前原町より海岸に沿ひ、畫の如き唐津灣の風光を賞觀しつゝ唐津に至ることが出来るのであるから、この路を採る觀光客が多い様である。

三、伊萬里灣

伊萬里灣は北々西より南々東に細長く灣入せる「リアス」式 (Rias Type) の灣であつて、灣内に福島を初め、七ツ島等數多の島嶼が散點し、沿岸海岸の屈曲は遙かに唐津灣よりも複雑を極め、地質は大部分第三紀夾炭層であつて、處々に安山岩や玄武岩の露出を観るに止り、唐津灣



伊萬里灣七ツ島

る幾多の島嶼に蟠踞せる松翠が碧波に映ずる景趣は全然松島と同轍である。
此附近の第三紀層は主に砂岩と頁岩の累層より

に於けるが如き雄大なる景觀は無いが、宛然瀬戸内海を縮寫した様な頗る變化に富める美景は人を惹き附けるに充分の力がある、灣内第三紀層より成れ



伊萬里灣波瀾天島

成り、走向は一般に東北であつて、西北に十五度内外傾斜して居る、海岸や島嶼の側崖に於て鮮かに其成層の狀況を示せるのみならず、灣の

東側より西に斗出せる牧島に於ては西北に緩斜せる地形が、よく這般の地質構造を表はして居る、此第三紀層中に介在せる石炭は厚さ一二尺より五六尺

に達するものがあり、處によりては火山岩の爲めに炭化作用が促進せられて燐石化し、又は無煙炭に爲りて居る、水運の利便があるから、性質劣等の

薄炭まで

も有利に

掘採せら

れて居る

從來小炭

山の數多

經營せら

れたのは

灣の西側

久原、立

岩、今福

附近及び

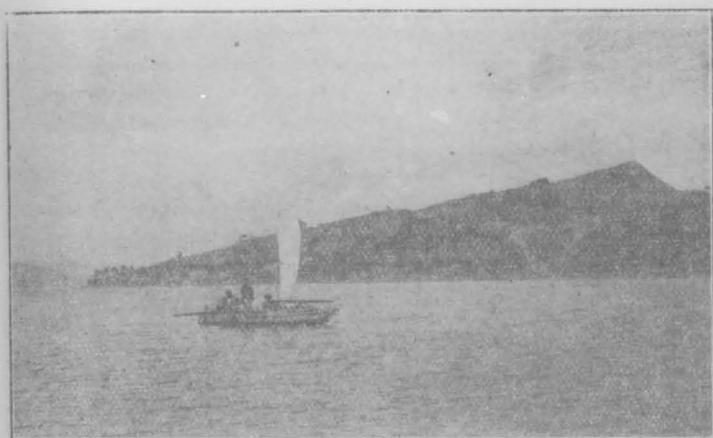
東側の高

串附近で

福島に於

ては堂々

肥前伊萬里灣牧島



たる大規模の鑛業が營まれた、只海水が近い爲めに、往々坑内の出水に惱まされるのは是非もない。

四、唐津灣及び伊萬里

灣の交通沿革

唐津は其東方に於ける博多と共に、古來北九州に於て支那、朝鮮との交通の要津で、奈良朝平安朝の頃より博多の方が主要なる開港場と爲つた様であるが、其より以前に溯れば、唐津の方が却て主要なる港であつた時代もある様に思はれる、彼の佐用姫の領巾振山の傳説は遠く欽明朝の事であり又唐津鐵道線に沿へる相知附近鵜戸の石佛には大分市の南方植田、古國府に於ける石佛と類似のものがあつて、其様式は恐くは隋唐以前のものであるらしく、博多附近にはこの種の石佛は全く見當らない事から推せば、其時代に於ては、唐津は北九州に於ける最も重要な港であつたに相違ない、其後九州の都督府が博多の南、四王寺山麓に置かれ是れが九州統治の中心と爲りてから、博多の方が對外的に



松浦百景 呼子港口の夕照

した事から考へても、唐津、伊萬里の兩灣が當時國防上如何に重要であつたかを想像する事が出来る、其より豊臣時代に至り、秀吉が征韓軍

も重要な港と爲つたものらしい、併し唐津は尙依然博多に次ぐ要港であつたに違ない、降りて文永弘安の頃元の江南軍の一部が伊萬里灣口の鷹島に上陸

の策源地を唐津の西北、呼子灣の名護屋に置き自ら滯陣した時に當りては、其に隣接せる唐津灣は矢張物資の供給や船舶の出入上頗る重要であつたに違ない、征韓役後、鍋島侯の保護獎勵によりて急劇に發達した有田焼の陶器は、主として伊萬里港より各地に輸送せられたもので、京阪地方では一般に有田焼とは云はずして伊萬里焼といふほどである、是によりても當時伊萬里港の陶器集散の盛況が想ひやらるゝ、今や伊萬里港は幕府時代の盛況に比すべくも無いが、唐津港は唐津炭田の産出石炭船積所として、重要なものみならず、絶好の海水浴場として、夏季の來遊客が年々増加し、市街は殷賑を増しつつある。

五、砂 鐵

九州沿岸に於て砂鐵を産するは、大分縣國東半島クニサキの東海岸と、鹿兒島縣薩摩の南端揖宿郡イサキの海岸とである、福岡縣遠賀郡や長崎縣大村灣の海岸にも多少砂鐵があるが、是は微々たるものである、國東郡の砂鐵は鶴川町より守江港に至る

間の海岸砂洲中に在りて、厚さ數寸より處によりては數尺に達することがある、主に磁鐵鑛粒であるが、輝石、角閃石、石英、石榴石等を混じて居る。是は國東半島から大分市までの間に多い輝石安山岩の如き火山岩が、霏爛分解し、波浪によりて粉碎せられたるものが、流漂の間比重淘汰によりて淘汰せられ、更に風浪によりて海岸に打ち寄せられたものであつて、頑強にして比重大なる磁鐵鑛が局處に堆積したものである、故に一定の場處を殆んど採取し盡しても大嵐のあつた後には復た新に堆積して居るといふ事である。

薩摩南端の砂鐵は、揖宿郡揖宿附近の鹿兒島灣沿岸、山川港より南端の長崎に至る沿岸及び額姪村より馬渡川河口附近に至る一帯の砂洲中に在る、其存在狀態及び堆積の由來は、國東郡に於けると略々同様である。

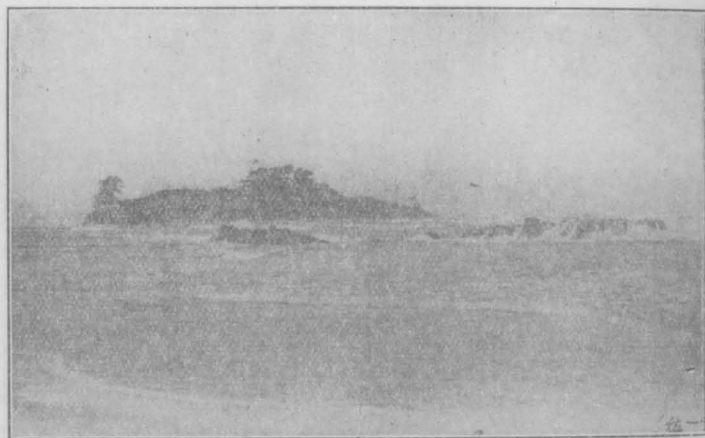
是等の砂鐵は現時に於ては、之を碎いて琢磨劑又は礮寸箱の塗料等に使用せられ、製鐵の原料としては用ひられ無いが、數百年前、鐵鑛の

得難き時代に於ては、刀劔用の鐵を精煉する原料として、一般に砂鐵が使用せられた様である故に砂鐵の產地附近には必ず鍛刀所が在り、優秀なる刀工を出したといふ事は、武器製造の地理的沿革上注意に値する事項である、是に就ては小川博士が最近研鑽の結果を、本誌上に公表せらるゝ筈である。

六、宮崎縣の海岸と青島

枇榔島植物の特徴

宮崎縣の海岸中北方大分縣界より細島附近に至る間は、特有なる「リアス」式海岸で、古生層中生層の岩角海に臨み、頗る出入屈曲に富んで居るが、美々津川河口以南、加江田川河口に至る間は、形勢一變し海岸は低平にして殆んど直線を爲し、一帯の砂丘著しく發達し、甚だ單調である、折生迫の東戸崎鼻より以南都井岬に至る間の海岸は、更に一變し、丘陵海に迫り、第三紀砂岩、頁岩が數多の單斜累層を以て海に臨み、恰かも洋書を累ねて倒したるが如く、實に特有の景觀を呈して居る、走向は北々西若くは



日向青島全景

の良港である。油津より東北約二里半の海岸丘陵上に鶴戸神宮がある、懸崖を以て日向灘に臨み、風光の雄大莊嚴、實に九州の官幣大社中の

北々東で東北又は東南に緩斜して居る、南那珂郡中央部廣戸川河口には油津港がある、油津灣は南方に開き灣内水深く波靜にして、實に宮崎縣沿岸第一

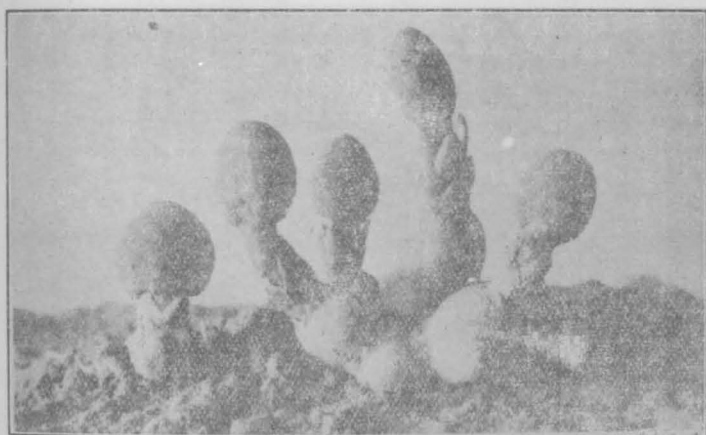
第一である、這般悠久なる自然の大景に接し、巖頭に立て、遙に大洋上に出る旭日を拜すれば神代の昔を偲ぶに十分である。



珍植物 やつこさう

宮崎市の南約四里、折生迫の北に一小島青ケ島がある、海岸砂洲より僅かに三四町で、海は淺く干潮には徒渉する事が出来る、今は海岸から島まで木

橋が架けてある、青島の植物は全然特殊のものばかりで、枇杷の木が林を爲し、「やつこさう」や、「みやまつ」「ちどりもち」の如き珍植物が砂



珍植物 みやまつ ちどりもち

洲に自生して居る

南那珂

郡の南方

有明灣内

の枇杷島

にも枇杷

樹が繁茂

して居り

鹿児島縣

薩摩の南

端赤崎附

近には、

蘇鐵の野

生が頗る
多い、斯
く九州の

東南海岸に熱帶的の特有植物が澤山野生するのは、黒潮暖流が海岸を洗ひ、熱帯地方の植物種子を流し來りて之を播布したものであらう。

(大正十三年十一月廿日記) (完)

天の橋立 (圖版説明)

天の橋立は興謝ノ海(宮津灣)の西側にあつて、北から南三十五度西に突き出て、岩端の部落をつゝむ西の灣入を殆んど興謝ノ海から斷ち切つて居る。長さ二十八町、幅は三十間内外であるが全長の中央に近い處では幅が十三四間に及ばない砂嘴である。尤も北部には砂の外に砂利も交つて居る。この砂嘴は西側からは北西の卓越風が來、東側では日本海から興謝の海に入りこんでくる波が北東から打寄せるので、此の二つの反對な方向の風と波とで砂嘴が出来たものと考へられる。今では文珠から砂嘴の南端にある砂島を経て二つの橋で陸地から交通される。今年のうちには宮津までの汽車が西にのびて一覽するには便利となるであらう。圖版は北の成相山から見た大觀である。この圖版を見る人は昔の人の丁髷の如き松原を見て微笑(ほゑ)まれますには居られまい。